

地球温暖化といも類生産

一般財団法人 いも類振興会 理事長 狩谷 昭男

2013年は、夏の猛暑、豪雨の発生、秋の大型台風襲来、11月も早々に寒波到来があり、気象変動の激しい一年であった。2014年は、災害のない平穏な年であって欲しい。

折りしも、2013年9月27日に公表された国連の気象変動に関する政府間パネル(IPCC^{注1)}) が6年ぶりに提示した報告書は、世界各国に気候変動の危機を強く訴える内容となった。更に、世界で頻発する干ばつや猛暑、豪雨などは、温暖化に起因すると警鐘を鳴らしている。

今回のIPCC報告書のポイントは、①気温上昇が人間活動に起因する可能性は95%以上、②温暖化ガスの濃度は少なくとも最近80万年で前例のない水準、③CO₂濃度は産業革命前から40%増加、④21世紀末までに気温は0.3~4.8℃上昇、⑤同期間で海面は26~82cm上昇、である。

世界各地でみられる激しい気象変動に加え、今回のIPCC報告書をみれば、地球温暖化^{注2)}の進行は、現実のものとして受け止めざるを得ない。現在、日本の農業における地球温暖化対策は、どのような状況にあるのだろうか。稲作では早い段階から耐暑性品種の育成のほか、乳白米の防止対策として田植時期を遅らせるなどの栽培・管理方法が見直されてきた。だが、稲作、果樹を除いた他の作物では具体的な対応策は、ほとんど進んでいないといっても過言

ではなからう。

一方、サツマイモ、ジャガイモのいも類も地球温暖化対策は遅れているようだ。例えば、本誌にこれまで掲載された地球温暖化関連の記事をみても、吉田 稔がNo.80(2004年7月)で「地球温暖化といも作り」の中で、褐色心腐、中心空洞、そうか病、水いもを例に発生の要因とその対策を、また、広田知良がNo.103(2010年4月)で、「気候変動(土壌凍結深変動)と野良イモの問題および対策」について、解説しているにすぎない。

サツマイモは2010~2012年産が、ジャガイモでは2009~2011年産が、それぞれ連続して不作となった。その要因分析をみると、大雑把に“天候不順”の一言でかたづけられてきた感は否めない。地球温暖化が常態となりつつある今日、いも類においても地球温暖化の進行を見据えつつ地域特性に配慮した品種の育成、栽培・管理方法などの新たな対応策が求められていると言えよう。

注1) IPCCとは、Intergovernmental Panel on Climate Changeの略。地球温暖化に関する研究成果を世界の研究者が整理し、最新の報告書としてまとめる作業を担う国連機関。

注2) 地球温暖化とは、二酸化炭素(CO₂)などの温暖化ガスの排出量の増加に伴い、地球規模で気温が上昇する現象。